目覚めると勇者の飼い猫だった

今ダ　果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目覚めると勇者の飼い猫だった

【Ｎコード】
Ｎ３９５２Ｚ

【作者名】
今ダ　果枯

【あらすじ】
今日も朝目覚めると勇者の飼い猫になっていた……だと！？

我が輩は猫である。とはこういうことか。

目覚めて、そう思った。

私、浜名　小鳥は目覚めると勇者の飼い猫になっていた。
ちょっと待て！　まず勇者って何だ！　剣と魔法と冒険ものってことか。『とともの』なのか？　目覚めたら勇者じゃなくて勇者の飼い猫だと。せめて魔法使いとか、いやいや高望みそこまでしなくても勇者の従者とか、最悪村人Ａとか。せめて人語を話せるモンスターとか、、、突っ込みどころは一杯あるが飲もう。全部飲む。

しかし、でも、それでも、、、こいつの、このクソハーレム勇者が飼い主とか嫌だ。論外だ。

パーティ中の勇者を除く四人全員が美女、美人、美少女だ。
一人目、勇者にべったりな見た目十七歳ぐらいの美人魔法使い。
二人目、年は魔法使いと同じくらいボーイッシュな格闘家。
三人目、ロリコンを意欲そそる見た目をした巫女さん。
四人目、常に妙な色気を放つ盗賊兼アサシンの姉貴。

嫌だ、こんなハーレム勇者が飼い猫なんていやだ。って言うか飼い猫まで雌（女）ってどうよ。その徹底ぶり呆れを通りこして感服すらするぐらいだ。
ちなみに、私はエルフキャットという猫らしい。猫版エルフだと思ってくれればいい。なんでこんなことを知っているかと言うと。何故か知ってる。たぶんこの猫の知識だろう。
エルフキャットはひたすら滑々である。毛も尻尾も耳やら舌やら。

あとかなり安上がりで飼い易い。エサは皮膚で触れ合って魔力をあげればいいし、排泄もしない。動物より精霊に近く死ににくく。簡単な魔法も使う。

猫になってから数日。

「ミケーミケーどこー？」

魔法使いのマホさんが私を探している、我が輩は元人間、浜名小鳥（女）現エルフキャットのミケ（雌）である

そろそろエサの時間だ基本エサ当番は魔法使いのマホさん。このパーティ、勇者とマホさんとミコさんが魔法を使えるから、必然とマホさんがエサ当番になる。アホハーレム勇者は他の女といちゃいちゃしてる。

「みゃー」

鳴き声をあげて、居場所をしらせる。

今、バカハーレム勇者パーティは魔の森を横断中だった。

魔の森を横断することは相当難しいと言われれているが。実際、魔の森は入るのと出るのが難しいだけだ。中心部に近づくほど魔物は弱くなる。森の外側の方が人間と接触が多くなるから必然と言えるのだけど。

結果、勇者は人目を気にすることなく四六時中、女とイチャイチャ、さわさわ、などお戯れをしている。

「ミケ、こんなところに、おいで」

優しい声で語りかけてくる。

私もトテトテとマホに近づく。

マホさんは座って膝の上に私を乗せて。魔力を込めて背中を撫でてくる。これが絶妙に気持ちいい。

「みゃー」
「気持ちいい？」
「みゃー」
勇者のエサ与えは乱暴で正直願い下げだ。
「ミケ、最近ユウはミコちゃんとかトウカ相手ばかりしているわ、朝も夜も」
勇者がユウで、トウカは格闘家、ミコちゃんは巫女さん。ミコちゃんは意地悪で猫かぶりで私とおそろい。私の場合、リアル猫かぶりだけど
「私、もうお古なのかなぁ」
マホさん、、、かわいそう。正直マホさんには幸せになってほしい。マホさんを傷つけるから勇者は嫌い。

ハーレムは男しか幸せにしない。絶対そうだとは思わない。ハーレムで幸せになれる女性もいると思う。でも、そんなの欲の少ない女か百合か同じ空気吸ってるだけで幸せみたいな人だけだろう。

森の向こう側から二つの喘ぎ声が聞こえてくる。真昼から勇者様は、、、はぁ。

マホさんの魔力が濁るのを背中で感じる。
大勢の人間が自分一人を愛してほしい決まってる。それを了承したって納得できるとは限らない。

マホさんの頬を伝う涙をなめる、私の舌は滑々だから痛くないはず。なのにマホさんはさらに涙を零す。泣いてるマホさんはふつくしい。
「ミケ、わたし、、、今はあまりユウのこと好きじゃないのかもしれない」

そういって涙を流す。かわいい、私と結婚しよう。女だけど、さらに猫だけど。
服に潜り込んで、マホさんの控えめな胸を舐める。ただひたすらマホさんの埋まらない空虚を埋めるために。

さらに数日。
勇者パーティはほぼ森の中心に到達していた。かなりのローペースだ。昼夜問わずやりたい時にやりまくってるから。
「よっし、今日は俺がミケにエサやるは」
はっ、嫌だし論外、ありえない。
すぐさま捕まえようとする勇者をかわしマホさんの後ろに隠れる。
「ミケーそんなに僕のことが嫌いかぁ？」
ニヤニヤしながら追ってくる。おふざけだと思っているらしい。冗談じゃないこっちからすれば死活問題だ。
向こう側で至福面でピクピクしながらのびているアサシンの姉貴、アキネさんと格闘家のトウカを飛び越え全力で逃げる、捕まればマズイご飯だ、嫌だ嫌だ。

しかしチェックメイト。後ろを向いて走っていた私は前にいたミコちゃんとぶつかる、そのまま抱き上げられる。
「お兄ちゃん、今日のミケのご飯は私があげていい？」
にっこり微笑むミコちゃん、違うハーレム勇者じゃなくて私の意志を尊重しろ、このクソロリ女朗。
「いいよ、ミコもミケが可愛いもんね」
黙れこのクソ勇者、「にゃーにゃー」と叫ぶけど勇者とミコちゃんには喜んでいると解釈されてしまう。マホさんは気付いているけど、どうも口出し辛いみたいだ。

そのまま木の陰に連行される。いやぁぁぁ。

「ほんと生意気な猫ね。ユウが可愛がろうとして上げてるのに逃げるなんて」

猫かぶりめ！

どんどん魔力をつぎ込んでくる。かなり苦しいお腹一杯みたいなしんどさと水に溺れているような苦しさが同時に襲ってくる。

しかもミコちゃんの魔力はまずくは無いけどドロドロしていてたくさん食べるには大変。

「それにしても、あの魔法使いは終わりよねぇ、もうユウと何日もやってないし、何でパーティにいるんだか」

このロリビッチ！　勇者パーティにいる存在意義は勇者とやることだって暗に言い切りやがった。

あと、私の前でマホさんの悪口は許さん。

魔法と前世の知恵を駆使して素早く巫女服を脱がせる。

「なっ、え！？」

戸惑っている。さすが私、早業である。

そのまま簡単な電気魔法などを発動しながらミコちゃんのありとあらゆる部分を舐める。

「え、そんな、だめぇぇぇ！？」

ふぅ、まだまだだね。もっと鍛えてからまた戦おう。

ミコちゃんは屈辱と至福の混じった顔を晒しながら横たわる

「へー獣姦、さすが清純な巫女様、性欲も段違いだねぇ恐れ入るよ」

もっと言ってやってください、アサシンの姉貴。

その日、丸一日はミコちゃんはアキネさんにそのネタでいじられることになった。

いい気味だ。

さらにさらに数日。

勇者様パーティの魔の森横断も終わりに近づいていた。早くて今日中、遅くても明日の午後には都市につく予定だ。

私はテレパシーを覚えた。

まだ一度も使ってないけどおそらく失敗はしないと思う。

マホさんと会話するためだけに覚えた魔法だ。勇者や巫女には知られない為に細心の注意を払わなければならない。

「さーミケ、ご飯の時間だよぉ」

「みゃー」

今日の当番はマホさん、この日が待ちどおしかった。勇者のご飯は痛い、いが栗でも喉に詰め込まれる気分だ。巫女さんのご飯はねばねばドロドロで餅でも無理やり食べさせられてる気分。

両方最高に最悪。

今日はマホさんの当番。待ってましたよマイエンジェル。

今まで辛かった寿命が縮む思いだった。

「ほーらミケ」

「あーら、可愛そうな娘、なんでお前みたいなのが勇者様と一緒にいるんだか」

「……ミコちゃん」

「動物がお友達だもんねー、あはははは」

高笑いしながら去っていくミコちゃん

ミコちゃんはここ数日でマホさんへの態度が激変した。

きっかけはマホさんが勇者様の夜のお誘いを「気分がすぐれない」

とお断りしてからだった。
勇者は「そうか」程度の反応だったが。パーティメンバーはそうではなかった。特にミコちゃんは直接言ってくる。私のマホさんに汚い罵倒を振り掛ける。

「みゃー」
「ミケ、心配しないで」

「ミケ、、、私なんでユウと一緒にいるのかなぁ？」

――マホさん、逃げよう。こんな人達相手にしても疲れるだけだよ。

「え！？　誰？」
きょろきょろと周りを見るマホさん。

――ミケだよ、私だよマホさん
じっと私を見詰めるマホさん。
「ミケ、、、なの？」
――そんなに見詰められると照れちゃう
猫の手で頭をかく。
「本当にミケなの？」
――そうだよ、ミケだよマホさん。

――もう我慢しないで、逃げようよマホさん。

「でも、私には、、、私には使命がある」
――でも、その使命はマホさんじゃなくてもいいじゃない！

――私は一人で逃げればそのうち餓死してしまう、私を理由にして、私にはあなたが必要なの

マホさんは泣いた。泣いて。一通り泣き終えてから笑った。
「あなた、女の子よね？」
――うん、そうだよ
「まるで告白みたいね」

――私はあなたのことが好きよ。愛しているわ、大事なの
少し驚いて赤面する。
「ユウはそんな告白してくれなかったわ」
マホさんはにっこり微笑んでくれる。
「どこまで行きましょうか？」

――貴女とならどこまででも

end

この後、マホとミケは「勇者に捨てられた女の会」を作るのだが、
それはまた別の話である。

（後書き）

続きなんて、あるわけない。

嘘です続きを書いていたのですが行き詰まり短編で出すことに折れてしまいました。

だめな作者でごめんなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3952z/

目覚めると勇者の飼い猫だった

2011年12月16日23時49分発行